

フィギュアスケートにおける感覚と 調和の人類学的研究

——氷上の身体技法——

Anthropological study of Sensation and Harmony in Figure Skating:
Techniques of the Body on the Ice

荒川 祐有

キーワード：身体技法，身体感覚，フィギュアスケート，氷，オートエスノ
グラフィー

This study focused on the senses involved in single figure-skating competitions. Through the verbalization of tacit knowledge, we aimed to clarify the physical techniques and sensations on ice that emerge from the relationship between humans and ice.

In figure-skating research to date, many studies have performed quantitative data analyses; however, few have approached the subject from the perspective of sensation. In this study, we investigated bodily sensations from the perspective of cultural anthropology using autoethnographic methods. This area has not previously been studied due to criticism that it is subjective and, therefore, not a valid research topic.

Despite figure skating being a sport that cannot exist without ice, only a few studies have examined the nature of the ice itself. I investigated how figure-skaters perceive ice that changes under various conditions. The research was conducted not only at our regular skating rink, which serves

as our daily field but also at multiple venues simultaneously. This approach was taken to maximize the verbalization of tacit knowledge.

By compiling records from field participant observations, it was revealed that each skating rink had distinct ice characteristics, such as hardness. Furthermore, even at the same location, the ice was found to be constantly changing depending on the surrounding environment, behaving almost like a living organism.

In addition, analysis of the observation records uncovered the keyword “chewing sensation”. This study clarified what “chewing sensation” means and how skaters experience it as they skate and perform on the ice.

目次

はじめに 研究の目的とその動機

I 先行研究の検討

- 1 身体技法研究
- 2 フィギュアスケートと氷上研究
- 3 フィギュアスケートともの研究

II 研究の方法と内容

- 1 研究の方法
- 2 調査内容の概要

III 氷上の感覚

- 1 指導者からの言葉
- 2 製氷
- 3 〔新横浜〕の氷

IV スケートリンクごとの特色

- 1 銀河アリーナ
- 2 横浜銀行アイスアリーナ
- 3 三井不動産アイスパーク船橋

4	ダイドードリンコアイスアリーナ
5	アクアリンク千葉
6	東大和スケートセンター
V	分析
1	氷の硬さ
2	噛む感じ
3	氷の硬さと噛む感じ
4	考察
VI	結論
	謝辞
	注
	参考文献
	専門用語一覧
	調査対象者人物一覧表

はじめに 研究の目的とその動機

本論文では、フィギュアスケートのシングル競技¹⁾を対象として、氷上における身体感覚に焦点をあてて考察する。人と氷との関わりから、氷上における身体技法と身体感覚はいかなるものかを、暗黙知の言語化により、明らかにすることを目指す。

スポーツの研究において主流な議論は、量的研究に基づくデータ分析であり、その研究手法は年々進化を遂げ競技スポーツ界に様々な貢献をしている。しかしながら、これらの研究における課題点は、実際の身体感覚については不明であるということだ。実際に身体動作を行う際に重要となるのは、競技者自身の感覚であり、データや数値はあくまでも指標だ。しかし研究において感覚に焦点があてられたものはごく僅かである。これは競技スポーツ界において、感覚は人それぞれであり、なおかつはっきりしたものではない、という意識が関係しているのではないだろうか²⁾。また感覚は主観的であり、

客観的指標がなければ意味をなさないと考えている研究者も少なくない。筆者は文化人類学という視点から、この問題に取り組む。

I 先行研究の検討

1 身体技法研究

人類学においては身体技法論が最も著名な身体に関する論であろう。身体は社会環境によってその動き方を覚え、型（ハビトゥスの日本語訳でもある）に沿って動くようになる、というものである。川田順造は、歩き方の違いから、それぞれの地域での生活スタイルが反映され、それぞれ生活に合った歩行が伝承されていることを明らかにした [川田 1992]。倉島哲は、技に焦点をあて、身体的ディテールと呼ぶ行為に着目することで、相互身体的視点という概念を導き出した [倉島 2007]。本論文では、スケートリンク（以下、主たる研究フィールドを含む氷上スポーツ用の設備を備えた施設をこの語で表す）という限られた閉鎖的空間の内部で共有される身体の動かし方を身体技法と捉える。スケートリンク内で練習着に着替えたなら、そして、フィギュアスケート靴に履き替えたなら、そこからは、年齢・性別問わず、“フィギュアスケーター”³⁾（というハビトゥスを持った者）になるためである。

2 フィギュアスケートと氷上研究

本研究の対象は、陸の上ではなく、氷の上における身体技法である。本論文では、氷上競技の中でもフィギュアスケートに焦点をあてる。氷上においては、進化を重ねるモーションキャプチャー等のデータ分析研究は発展途上の段階である。活用が進んでいない背景として、フィギュアスケートという競技の、移動が早いこと、回転が識別できないこと、反射に対応できないこと等が問題点として挙げられている [山下他 2015；竹内 2017；羽生 2021]。相当な研究データは出ているものの、未だ有用な分析道具とはなっていない。なにより、競技者にとってデータのための道具⁴⁾を身に付けることが負担になっており、正確なデータ取得が難しいという段階である。フィギュアスケ-

トは繊細な感覚を必要とするスポーツである。靴底についているブレードの位置を 1 mm 単位、あるいはそれ以下の範囲で調整したり、衣装の重さを 1 mg 単位で調整したりする。動きやすさは 1 番の要素であり、動きにくい、重りがつきバランスが取りにくい研究道具は邪魔になる。また、元来の人間の能力を超えるスピードで動くため、これらの平衡感覚を崩しかねない道具を身に付けての動作では、技を正確に行うことが難しくなり、正確なデータ取得はできない。このことから、氷上の動作分析は肉眼によるもの、あるいは通信機器に付随するカメラ等で行う場合が大半である。このような環境であることから、筆者は氷上感覚の分析研究の必要性を感じ、本論文を執筆する。

3 フィギュアスケートともの研究

人類学では近年、人間社会の営みは、人間だけでなく自然・環境や“もの”との関わり抜きには成立しない、という考え方がある [床呂・河合編 2011, 2019]。筆者は氷を、競技者の延長線上にある“もの”として捉え、研究を進める。フィギュアスケートでは、複数の“もの”が関係している。フィギュアスケートの採点に関する研究は、ジャッジの匿名性による恣意的な点数の上げ下げ等の影響の研究 [橘ほか 2017, 2018]、音楽については、芸術性と編曲についての研究 [柳田 2015; 安原・佐藤 2017]、芸術性と音楽の密接な関係性に着目した研究 [町田 2022] がある。靴に関しては、フィギュアスケート用の靴の機能の研究 [武田 2020]、ブレード⁵⁾の現状打破のための研究 [水野・小塚 2019]、ブレード研磨⁶⁾についての研究 [小野寺ほか 2023] がある。これらはいずれも“もの”の研究であり、それ単体での研究に留まっている。包括的な研究として、町田樹はフィギュアスケートをはじめとする採点競技のうち、「評価対象となる身体運動の中に、音楽に動機付けられた表現行為が内在するスポーツを〈アーティスティックスポーツ〉と新たに定義」 [町田 2020: 16, 68] した。このように、フィギュアスケートに関する研究は複数の視点から行われているが、フィギュアスケートに不可欠な要素である氷に関する研究がほとんどない。この点から、本論文では氷に焦点をあて論じる。

Ⅱ 研究の方法と内容

1 研究の方法

本研究では、フィールドにおける当事者視点での文化人類学的研究（参与観察）、オートエスノグラフィーの手法により研究を行う。この手法は、スポーツ競技者自らが研究を行う際の方法としても、活用され始めている [八田・田中 2017; 水野 2020]。本研究では、筆者自らが競技活動を行い、プロの指導を頻繁に受けることができ、十分に感覚を認知することができる⁷⁾ フィギュアスケートを対象とし、調査を行う。主観的視点のみでは、エビデンスに欠けるというスポーツ研究からの批判に答えるにあたり、哲学・現象学者の村上靖彦の言葉を引用する。

エビデンスによって有効な診断方法や治療法が整備されるということには異論がないし、私自身もエビデンスにもとづく医療を選ぶ。しかし病の経験は、エビデンスにもとづく選択だけでは語りきれない。

（中略）エビデンスによって有効とされる治療を選ぶプロセスには隙限がない。病が進行していくプロセスのなかで、効果が出る確率が高い治療法が選ばれることが多いだろう。しかし確率が高いといっても「四〇%の人にはこの治療法が有効であった」という意味であり、残りの六〇%の患者には効かない。つねに数値をめぐる患者は「効かないかもしれない」と不安な状態に置かれることになる。[村上 2023 : 51-53]

一人ひとりの個別の経験は、客観的学問にとっては切り捨てられるべきものとみなされた。一人ひとりの偶発的でうつろいやすい多様な経験は、まさにそのうつろいやすさゆえに科学において価値を失った。ところが、うつろいやすさや、偶然、個別性のなかにこそ、経験の重さが宿る。客観的な学問によって多くの有益な知が得られるのが、だからといって自分の経験の個別性を切り崩す必要はない。[村上 2023 : 134]

フィギュアスケートの感覚はフィギュアスケートを実施する者しか会得することのできないものであり、フィギュアスケーターの日常実践はフィギュアスケーターにしか知り得ない。このことから、筆者は競技者として、エミックスの視点から調査を行う。筆者が競技者（選手）としてクラブ登録を行っている「KOSÈ 新横浜スケートセンター」（以後〔新横浜〕と表記）を主たる研究フィールドとして調査する。

筆者はこれまで、暗黙知を最大限言語化する取り組みを行い、その方法を探ってきたが、その全てを言語化するのは“暗黙知”ゆえに、難しかった。しかし身体感覚の習得過程、特に普段の環境に変化がある場合には、からだメタ認知論〔諏訪 2016〕を応用することで、一定程度の言語化が可能となった。その言語化により筆者は、ある周辺環境が変化するとき、競技者はその変化を感じ取り、“もの”との調和を行っているということを明らかにした〔荒川 2023〕。本論文でもこの言語化メカニズムを踏襲する。

上記理由により、主たる研究フィールドのみでなく、複数の場（スケートリンク）での調査も行う。これは、主たるフィールドのみで調査を完結することで、限定された身体技法との批判を避けるためでもある。首都圏のスケートリンク 5 か所を追加のフィールドとして、主たるフィールドで行うものと同じ項目で調査を行う。

スケートリンクには、通年リンクと、季節リンクがある。季節リンクは、夏の間はプールとして営業形態を変えて営業する施設と、夏の間は閉鎖休業する施設がある。現在、日本全国には 144 のスケートリンクがあるが、このうち通年リンクは 29 である⁸⁾。本論文での調査対象は、通年リンク 6、季節リンク 1 である。

2 調査内容の概要

(1) フィールド概要

「KOSÈ 新横浜スケートセンター」は、新横浜プリンスホテルが経営しているスケートリンクである。プリンスホテルは、全国に様々なレジャー施設を経営しているが、スケートリンクもそのレジャー施設のひとつである。か

つては品川にもスケートリンクを持っていたが、現在はプリンスホテルが経営するスケートリンクは〔新横浜〕のみである。〔新横浜〕は、1990年10月に「新横浜プリンスホテルスケートセンター」としてオープンし、2020年に開業から30年を迎えた、神奈川県横浜市にある通年リンクである。1992年の「新横浜プリンスホテル」オープンに先駆けて作られた。2007年、名称が「新横浜スケートセンター」となり、2017年には、ネーミングライツ契約の締結により「KOSÉ 新横浜スケートセンター」となった。2016年には、施設設備を一新するリニューアル工事を行っている。

〔新横浜〕の営業時間は、大きく二つの時間に区別される。一般営業の時間と貸切営業の時間である。一般営業時間とは、スケートを楽しむ場として、一般客に開放・営業している時間である。通常、その日の使用料・滑走料を支払って利用する。貸切営業時間には、〔新横浜〕のクラブの貸切時間と、枠単位で予約ができる貸切時間がある。クラブ枠には、シングル競技の他、アイスダンス競技と、主に余暇としてフィギュアスケートを楽しんでいる大人向けのクラスがカテゴライズされている。所属カテゴリーにより、貸切時間が変わる⁹⁾。

その他のフィールドについては、IV章で詳述する。

(2) 調査の立場と調査内容

筆者は現在、試合にも出場している現役のフィギュアスケーターである。日々競技レベルアップのための練習をしており、専属コーチからの教えも受けている。主たる研究フィールドである〔新横浜〕では、そのレッスンでの出来事や普段のスケートリンクでの出来事等を、参与観察記録としてまとめた。その他、氷の状態等の周囲の環境、競技者の身体感覚の変化、技の出来栄や技の成否についても記録した。〔新横浜〕を除くスケートリンクでは、レッスンに関するもの以外について参与観察を行い記録した。

〔新横浜〕の記録は2021年4月1日から、その他のフィールドは2023年4月1日から、いずれも2024年9月30日までを調査期間とする。

Ⅲ 氷上の感覚

1 指導者からの言葉

氷上では、普段の陸上での生活では使わない感覚を使う。氷上における感覚は、氷上にいることでしか培われたい。そのため、指導者からは、できるだけ長時間、氷上で過ごすことを求められる。

以降に記載する「エピソード」は観察記録に基づくものである。そのため、エピソード内の記述は当時の筆者の感想が含まれる（エピソード内あるいは調査記録中の一人称には「私」を用いる）。対してエピソード前後は論文の記述である。また、エピソード内の「 」で括られている発言は、全て筆者以外の人物の発言である。なおエピソードにおいて、場所の記載がないものは、全て〔新横浜〕で記録されたものである。

【エピソード1 陸と氷の感覚は別】

2023/2/28 (火) リンク内気温 4.7℃¹⁰⁾

A コーチ¹¹⁾ とジャンプ¹²⁾ の課題について話している中で、「(氷)のってる¹³⁾ だけ」と言われた。私も言われて課題に気がついた。「陸では(捻りの動作を)自分で動かす必要があるけれど、氷では形を作って〈のって〉¹⁴⁾ いれば(捻られながら)滑っていく。」

2023/6/12 14.8℃

先週、(ジャンプが)かなり跳べるようになって、動きが硬いのが課題だったので、自然な形で跳べるように練習した。滑っていくことを意識して練習。

A コーチから「〈滑る〉の感覚の話をしたけど、スケートの靴は、ブレードの分高いし細いから、陸上よりも踏み込まないと安定しない」と言われた。「跳ぶときのタイミング、合っていないのでは」と言われた。

(中略)

タイミング合って跳べるようになった。

2024/1/23 (火) 気温記載忘れ

最初、ジャンプの軸が取れなかった。パンク¹⁵⁾したりしていた。一旦 A コーチのところへ行ったら、「跳ぶのに陸上のような力はいらない、滑ってきた勢いのまま跳ぶ」と言われた。「陸では捻って、捻り返す勢いを使うけど、氷はじーっと待ってたら勝手に滑ってくるから、そこで跳んで締めるだけ。跳び上がるときに力入れる必要はない、締めるときだけでいい」と言われ、もう一度、ループ¹⁶⁾から練習を始める。力入れないで跳び上がる感じが掴めてきた。そうしたら、ループも軸がとれて、フリップ¹⁷⁾もルッツ¹⁸⁾も問題なく跳べた。

練習の中で、主にジャンプの指導の際に、陸との違いを指摘される。滑ることを意識するように、という指導を受ける。氷の特質である滑りを活かそうと練習するが、うまく合わないときがある。そこで、陸上での身体の動かし方やタイミングが氷上でのものとは異なることをよく指導される。

次は、日本スケート界における先駆者である佐藤信夫コーチ・佐藤久美子コーチへのヒアリングの際のエピソードである。

【エピソード2 氷上感覚は本能にはない】

2022/3/11 (金) N=信夫コーチ K=久美子コーチ Y=筆者

K：だから、スケートの練習だけではないけれども、やっぱりスケートって、動物が生きるのに、水泳は生きるために必要だよ。あのなんていうの、どんな動物でも泳ぐでしょ。

Y：はいはい。

K：歩くでしょ。歩くっていうか、進む。氷の上のものって何もないんだよ。(机をパタパタと叩く) ペンギンがこうやって歩いているぐらい。

Y：確かに、はい。

K：別の感覚。人間の生きていくための。だから、道を歩くように、何

にも感じないですれるようになるには、だから、ちっちゃい時から
やっぱり、やるのが大事だっていう。

Y：ふーん……（納得、考えさせられる）

N：僕ら5、6歳からって、いう風に言われてたけどね、やっぱり実際に
やってみたら、もう2、3歳だよな。

Y：あーそうですか。

N：2、3歳ぐらいから、こういうふうには歩いてる子は、やっぱりし。

K：2歳っていうのはちょっとね、あれだけど、うん、3歳、4歳だね。

Y：もう全然見てると違うんですか、それ。

N：やっぱりどんな子でも、ほっぽっといても歩くようになるじゃない
ですか。それで同じように歩くでしょ。

Y：はいはいはい。

N：ということは、その体のサイズに合わせて、ちゃんと全身のバラン
スをうまく取りながら歩いてるわけじゃないですか。それは誰も教
えない。

Y：うん、そうですね。

N：勝手に覚えています。ね。それは、その、人間の体の持つる本能
的な行動じゃないですか。身を守るという、ね、本能だと思います。
でも、スケートなんかはやっぱりそうじゃないから。人間が生きる
上において、絶対これがなきゃ生きられないんだよってものではな
いでしょう。

Y：あー、はい。

N：だから、そこに難しさ、不自然さというものが、どうしても残って
しまうということですよな。

※下線は筆者による

陸上と氷上の感覚は別物である。身体感覚は陸上そのままというわけには
いかず、最初は立つことすらままならない。氷に乗り続けることで、身体に
必要な感覚であることを覚えさせなければいけない。氷上の身体技法の特殊

さを、人間の本能という言葉を用いた指摘には考えさせられた。水に入ることとは胎児から本能として必要なことであるが、氷にのことは、“歩き方”¹⁹⁾の習得と同様に生まれた後に習得する身体技法であろう。本能という言葉で表した信夫コーチの感覚表現から、競技者を納得させる奥深さを感じた。

以下、氷とはどう特殊なのか、スケートリンクの水という視点から述べる。

2 製氷

スケートリンクにおける氷は、水及びお湯（水道水そのままではなく、成分の割合を調整したもの）を何層にも重ねて膜を張ったものである。滑走することで、表面に傷がつき、削れる。削れたものは雪状態となり、氷に蓄積していく。滑走の傷もエッジ²⁰⁾が深い（氷に深く食い込ませて傾けて滑る）ほど深い線となり、氷に残る。またトゥ²¹⁾をつく等すると穴があくため、ジャンプ練習後は穴がたくさんできる。これらを平らにするために、製氷車は表面の水を削り、お湯を撒いて平らにならしていく。

この平らにならす作業が製氷である。氷の状態を保つために製氷作業は欠かせない。滑走している状態で3時間以上製氷の間隔を開けてしまうと、表面がデコボコとなり滑走に影響がでてしまう。また、氷の品質を保つためにも頻繁に製氷作業が行われる。

〔新横浜〕は、他リンクと比べ一般滑走時の製氷間隔が長い。そのため、製氷直前は氷のデコボコが多くなり、摩擦が起きやすい。〔新横浜〕のクラブ貸切の合間は、基本的には2コマごと（約2時間）にそれぞれ10分ほど製氷作業が行われるが、次の貸切との間隔が短いため、短時間で行う必要がある。これは試合やアイスショー等の場でも同様である。ただし、その日最初の製氷等、前後にゆとりがあるときには、30分ほどかけて、2回製氷を行う等、細かな作業が行われる。その日そのときの状態に合わせて氷を削る量（製氷車の刃の向きを変える）、お湯を撒く量を変える。製氷作業は、製氷前の氷の使用状況（フィギュアの練習かホッケーの練習か企業貸切での使用か等）の他に、館内気温によっても左右されるため、製氷作業者は細かい観察力と感覚が求められる。

【エピソード3 製氷車の上からの感覚】

2023/11/12（日）

大会の合間に製氷作業を行うB氏と話す機会があった。よく大会の手伝いをしている友人を介し、話しを始めることができた。話している中で、製氷車の運転の仕方についての話題になった。一部抜粋である。

製氷車に乗っているとき、氷（について）わかるんですか？と聞いてみた。「硬いな、とかわかる」とのことだった。やはり車を通してでもわかるのだな、と思いながら聞いていると、「今日は氷が冷えてるから〇〇（硬い・調整の必要な氷というニュアンス、メモできず不明瞭）だな」と言った。「温度で変わるんですか」と聞くと、「氷はスパイクで噛んでる。温度が高く（氷が）柔らかすぎると噛まなくなる」「冷えすぎると、アクセル強く踏むと空回りする」とのことだった。製氷車の調整によって氷の状態が大きく左右されることがわかるエピソードだ、と感じながら聞いていた。

温度で氷の感覚が変わることは、筆者も滑っていて十分感じるころである。製氷作業、氷のメンテナンスを行う作業者はどのように感じているのか知りたかったため、すかさず質問を試みた。スケーターは靴とブレードを通して感じるが、整備者は製氷車を通して感じていることがわかった。

【エピソード4 製氷で気をつけること】

2024/9/19（木）

リンクの職員Cに話を聞いた。スケートリンクの運営の他、フィギュアクラブを担当し、製氷作業を行うこともある人物である。

製氷のとき気をつけていることがあるか？と質問した。例えばお湯を撒いた方がいいとか、氷の減り方とかを見てやっているのか？と聞くと、「うちだと、毎週月曜日に、あそこ、黄色い四角いパネル入っ

てんの知ってる？何か所か」と返された。パネルは気にしたことがなく、知らなかった。氷の中に？と質問すると、「そうそうそう。ホッケーのゴールの前²²⁾ とかに、こういう黄色い四角い板入ってんだけど、(中略)そこをドリルで(氷に)穴開けて、どんぐらい入ったかで、何センチ(cm)(になる)か、測ってるんだけど」この話を聞く前に、氷の作り方についての説明を聞いていた。氷を作る際は、まず4cmの厚さに氷を張って、その上にホッケーのライン等を置くそう。その際、同じ4cmの厚みの氷の上に、板も置く。そしてその上にさらに4cmの厚さの氷を作っていく、とのことであった。つまり、8cmの氷のちょうど中間に板があるため、氷の厚さを測るには、氷に穴をあけ、その板までの厚みを測るといことが行われているという。氷の中にそんな機能があることを知らなかった。

「その厚みを見て、例えば氷薄いからちょっと撒こうかなとか、でも館内温度高いから、撒きすぎると乾かないと、次の(貸切)に影響出るかなとかってというのは、気にしたい。でもやっぱ(製氷)かけてみて、こんぐらいで乾くだろうなと思ってかけて、かけ始めると全然乾かない時もあるし、逆にもうちょっと撒けたなっていう時もあるし。だから、こんぐらいいけるなって思ったのとドンピシャでハマる時もあるし。全然違う時もある」

氷は生き物のようであり、状況によって毎度変わる、対応の難しいものであることが示されているエピソードである。施設管理者による毎週の管理によって、氷の厚さが保たれ、競技者は不自由なく練習ができていたことを、再確認させられた。また氷の中や下に機能があることを、恥ずかしながら初めて認識した。普段は水の上だけを意識して滑走しているが、見えない、触れられない内部の重要性も知ることができた。また、普段からしっかり管理する人であっても、氷の状態を毎回把握することは難しいことがわかる。まさに生き物のように、氷はその状態を絶えず変化させていることがうかがえる。

3 〔新横浜〕の水

まずは、主たる研究フィールドである、〔新横浜〕での調査の記録から記述する。

〔新横浜〕の水の厚さは約 8 cm である。8 cm を維持するよう、水の調整を行い、日々の製氷作業を行っているようだ。室内温度は季節により、大体、3℃から 15℃である。コンクリートの上に不凍液（ブレイン）を流す管を敷き、ブレインを流している。ブレインの温度設定は、-11℃から-12℃である。そこから氷を作り、滑走面までが約 8 cm となっている。氷の一番下の温度は-6℃である。ただし、室内温度が高いため、氷の一番上、表面のブレードの接する面は、-3℃位とのことである。

以下は、日常の練習の中で記録されていた、〔新横浜〕の水に対する感覚、感想である。

【エピソード5 〔新横浜〕の水の感覚】

① 2023/7/3 (月) 14.1℃ 77%

アイスショー明けで、フェンス²³⁾がない！開放感。気持ちいい。

氷が今日は濡れてる。「この感じ嫌だ（濡れるから）」と D が言っている。氷は滑りやすい。やっぱり新横浜が1番滑りやすい。

② 2023/7/25 (火) 13.9℃ 64%

7級パッチ²⁴⁾のあとで穴がたくさんあいている。ジャンプで（跳ぶときに）力使っちゃう。氷硬いと感じる。噛み合っていない感じがする。貸切も混んでいる感じがする。いつもより人が少し多い。

③ 2023/7/26 (水) 14.9℃ 67%

外は猛暑日。

最近浜銀²⁵⁾の子がきている（リンク改装中）こともあって（ジャンプを跳ぶ子が多く）、リンクの半面の氷がでこぼこ（一般滑走時のジャンプエリア部分）。エッジジャンプがとても跳びにくい。

④ 2023/9/13 (水) 12.4℃ 64%

氷がきれい。よく滑る。

⑤ 2023/10/13 (金) 9.8℃

寒いと思ったら10℃を下回っていた。来週から長袖にしようか。

〔新横浜〕の水に対しての言葉は、“いつも”の水との振れ幅が大きかったときに記録されているものと思われる。言葉の出現は多くなくシンプルだが、特に滑りやすい、あるいは滑りにくいときに記録している。

以下のエピソードは、滑りやすい、あるいは滑りにくい水を、リンク毎の特色として捉えスケーター間で会話をしていたときのものである。

【エピソード6 好きな氷、嫌いな氷】

2021/7/9 (金)

① E 新横と岡谷²⁶⁾のリンクは好き。

硬すぎるところと柔らかすぎるところとめっちゃ冷えてるとこは苦手。

② F 新横、神宮²⁷⁾の水は好き。気温も寒すぎなくて好き。

硬い氷はジャンプがはじかれるから嫌い。

③ G 好きな氷は、〔新横浜〕のような硬すぎず柔らかすぎずな氷。

ホームリンクで慣れているということもあるが、リンクの温度も氷の硬さもちょうど良い。

嫌いな氷は、浜銀や銀河²⁸⁾とかの硬い氷。

氷に乗った瞬間、エッジが氷に弾かれているような感覚がする。初心者に戻ってしまったような怖さがある。スリップ²⁹⁾が多くなって、ジャンプがパンクしたり、ステップ³⁰⁾が浅くなったりする現象が起きているように感じる。

滑りやすく、好きな氷と、反対に、試合等では使用したくない、滑りにくい、マッチさせにくい氷について、各々が意見を持っていた。ただ、共通していたのは、〔新横浜〕は滑りやすい、ということだった。また、硬い氷が嫌い、という意見も共通している。ホームリンクが滑りやすく、〔新横浜〕は比較的柔らかい氷である、と認識していることがわかる。

【エピソード7 エッジの研ぎ方】

2024/9/19（木）

以前、Cが「北海道出身のためみんなよりエッジ深いんだよね」と言っていたことがあった。ヒアリングをする中で、その話を聞いてみた。

「北海道でそのまま（関東のエッジ研ぎの深さで）やったら抜ける³¹⁾。北海道ってもう館内自体が寒いから、もう本当にエッジ浅いと、抜けたりとか、刺さんないっていうとこだから、僕は比較的深めに研いでた」ここ（〔新横浜〕）でも、その深さに慣れて、深いまま滑っていたのか？と聞くと、「でも、その深さで、エッジ研いで、ここで滑ると、食い込みすぎて、なんか一気に戻した。普通の（深さ）に」そうだったのか。やはりリンクに合った深さに変えていたようだ。「（今の深さで）北海道いくと、それだと浅いなと思う。そんなに差はないんだろうけど。でも、多少やっぱ違う」

これは、〔新横浜〕と他地域のスケートリンクの氷とを比較したエピソードである。氷は冷えているほど硬くなり、硬くなるほど〈刺さらなく〉なることは、話者間での共通認識である。関東では、氷をどんなに冷やしても室内温度がマイナスであり続けることはない。対して北海道は、外気温が低いことから館内温度も低く、氷が硬くなる傾向にあるようだ。そのため、エッジの研ぎ方にも影響がでてくる。また、どちらに行くにしても、エッジの研ぎ方を変えずに滑走すると、滑りにくさが出てくることがうかがえる。

IV スケートリンクごとの特色

本章より、主たるフィールドではないスケートリンクにおける参与観察記録を提示する。この調査は、Ⅱ章で提示したように、暗黙知の言語化をより出現させること、限定された場における身体技法とならないために行うものである。それぞれのスケートリンクごとに節を分け、小括を記した。

1 銀河アリーナ（相模原市中央区）（呼び名：銀河）

滑走日：2023/4/24（月）、5/30（火）、2024/3/11（月）

（情報）

銀河アリーナは、相模原市にある季節スケートリンクである。夏場はプールとして営業しており、スケートリンクとしての営業は毎年11月から翌年の5月である。淵野辺公園内の施設の一つであり、指定管理者制度により、公益財団法人相模原市まち・みどり公社・株式会社パティネレジャー・美津濃株式会社が、銀河アリーナ運営共同事業体として運営を行っている。アリーナ内にはリンク・プールのみでなく、トレーニング室や会議室、レストラン等がある。今年度（23-24年度）はCOVID-19 ワクチン接種会場としても使用されていた。

スケートリンクの特徴としては、一般営業の時間が長い（8：30～19：30）ことがあげられる。また、特別専有（貸切）利用時には、相模原市民、ないし市内団体は優先的に使用予約を取ることができる上、料金も優遇される。一般営業時間における大人の入場・滑走料は1,000円である。

スケート教室やカーリング教室等は開催されているが、一般営業時間内におけるプロコーチによる指導は禁止されている。

（4/24 観察記録）

アリーナへ入り、券売機で券を購入しスケートリンク入り口の機械へ通す。入口脇には係員がいて、券を機械に入れてください、と声かけをされる。カウンターに現在の入場人数が表示されており、今日は22人の表記。リンクがある2階へ上がった。表記人数よりも空いていそうだと感じた。メインリンクでは10人弱が滑っているようだ。

ここの氷は、のった瞬間に不思議な感覚になる。〈薄い〉、〈板にのっているよう〉、と感じる。でもよく滑る。噛む感じがあまりしないが、よく滑る。〈浅い〉とも感じる（なぜこの言葉が出てきたのかよくわからないが、なんだかそのように感じた。実際はどうなのだろうか。季節リンクであることと何か関係があるかもしれない）。氷は硬め。ここの氷はスピ

ン³²⁾ がやりやすい (あまり割れないのだろうか、理由はよくわからない)。リンクが広く感じ、思い切り滑れることが気持ちいい。

(小括)

普段練習している〔新横浜〕のリンクと異なり、銀河にはフィギュアクラブが存在しない。そのためか、他リンクと比べて滑走者が少ない。また、スピードの速い滑走者、ジャンプ練習をよく行う滑走者が少ないことも、空いている、と感じる一因と考えられる。実際の利用者が少ないことは、最寄り駅から遠いという立地と、季節リンクであることが、考えられる。

水の厚さは極端に薄いことはないはずであるが、〔新横浜〕とは質の異なる水であることは容易に感じられる。〈薄い〉、〈板のよう〉、〈浅い〉というワードはどれも似通ったワードであり、実際に〔新横浜〕と比べると層の厚みや水の純度が異なるのかもしれない。リンクの広さは国際規格である 60 m × 30 m である (〔新横浜〕と同じ)。広く感じるのは、天井が高いことが理由ではないかと推測される。

2 横浜銀行アイスアリーナ (横浜市神奈川区) (呼び名: 浜銀、神奈川)

滑走日: 2023/4/26 (水)、4/28 (金)、5/1 (月)、8/11 (金)、2024/4/11 (木)

(情報)

ここは、かつて筆者がホームリンクとしていた (フィギュアクラブに所属していた) スケートリンクである (当時の名称は「神奈川スケートリンク」)。とはいえ、改修時に移籍したため、練習していた水・環境とは異なる。リンクは2階にある。1階は駐車場とスケート関連の小さなショップがある。横浜市体育協会が運営の主体である。一般営業時間における大人の入場・滑走料は1,350円である。

(4/26 観察記録)

2階に上がって券売機で券を購入。入口で係員に「済」のハンコを押

してもらおう。ベンチがたくさんある。コインロッカーも大量にある。10時から（一般）営業スタートのため、10時頃から行く予定だったが、出発が遅くなった結果、11時から滑り出した。大人、初心者スケーターが多い。振付³³⁾をしている選手がいて、ジャンプ、スピリエリア全面を使って行っている。ジャンプ練習の際にはこちらが振付者を避けなければいけない（振付の合間には避けてくれるが）ため、タイミングが合わず周回の時間が増えてしまう。

気持ちよく滑らない（とはいえ少しだが）。ターンがいつも（〔新横浜〕で）の軽さだと〈引かかる〉（いつもより踏み込まなければダメだと思った）。ちょっとだけ踏み込みを強くしたら、変わらないようにできた。エッジジャンプは、これまでこのリンクではやりにくかったが、今日は最初のにる感じがわかったら、特に困らなかった。また、前より氷が硬くなくなっている（以前滑走した以降にリンクのメンテナンスがあった）。前より寒くもない（だから恐らく、前より跳びやすいのか、と思った）。銀河より、踏み切る感触がある。

（4/28 観察記録）

Hがいた。滑り出した最初は、周遊しながら会話をした。「この氷硬くなくなったよね」という話をした。「前はやりにくい氷だったけど、今はいやではない」と言っていて、私も同じ印象をもっている。

（8/9 観察記録）

氷がざらざらする。製氷前だからか？と思ったが、なんだか滑りにくい。7月に氷の張り替えをしていたが、前の氷に戻ったような感じ。硬くなっている。そんなに気温は寒くないが。

ジャンプが全然上がらない。エッジジャンプが〔新横浜〕や他のリンクと感覚が違いすぎる。噛まないし跳び上がらない。だから降りてくるタイミングも違う。トゥジャンプは跳びやすいかも。製氷が入った。氷の感覚が変わるかと期待したが変わらなかった。

(小括)

かつて所属していたリンクであるため、他リンクに比べ親近感がある。〔新横浜〕や銀河と比べて、大人のレジャー施設として使用されている印象が強いように感じられる。運営主体は市の体育協会であり、施設内にある多目的ルームにおいて、スケートと関係のない市民活動を行っていることも、利用者の選択に影響を及ぼしているかもしれない。

調査期間中に氷の張り替えが行われた。寒く、氷が硬いことが競技者の中で共有されているリンクだったが、調査期間の前半はそれほど寒さを感じなかった。また、氷とのすり合わせは必要であったが、滑りにくさ、跳びにくさは、以前より減少していた。たまたま居合わせた、〔新横浜〕のクラブに所属する大学生スケーターも同じ意見であり、氷の質が変化したことが想像される。調査期間後半は、以前のような滑りにくさが戻っており、硬い氷との印象を受けた。調査期間前半の氷は、張り替え直前で、氷が緩く（柔らかく）なっていたのかもしれない。

3 三井不動産アイスパーク船橋（千葉県船橋市）（呼び名：船橋、南船橋、MF）

滑走日：2023/6/30（金）、8/13（日）、11/25（土）

(情報)

千葉県船橋市に2020年に開業したスケートリンクである。ここのリンクのフィギュアクラブはアカデミーという方式³⁴⁾で、特徴的である。スケート業界に広く参入している株式会社パティネレジャーが運営している。貸切を気軽に取れることも特徴であり、新しいリンクならではの方針なのではないかと感じる。ここで筆者が滑走するときは、一般営業時間ではなく、毎回貸切利用時である。

スケーター同士で貸切を取るときには、料金を抑えるためBリンクを使用している。Aリンクは1時間30,000円、Bリンクは1時間18,000円である。Aリンクは60×30mの国際規格の広さであるのに対し、Bリンクは38×24mである。

(6/30 観察記録)

今回は主に男子スケーターで貸切を取った。

氷は、滑りやすいが、少し硬いという印象。すごく〈のっていく〉感じがする、加速する。でも滑りはいいのに、エッジジャンプは跳ぶ直前になると、〈ういている感じ〉がする、〈挟み込まれない〉感じ。滑ってくるところまではとてもものっている感じがするのに、そのままでは跳び上がれない。最初にひどい失敗をしたらIから「おい現役！（笑）」と声がかかる。Dも同じような失敗をしてIから同じように声がかかる。

できるようにするために感覚を合わせる。強く踏み込むわけではないが、ホールド感がないので、挟み込ませるようにしてみる。〈刺さる〉に近いと感じる。それでも、いつもよりエッジジャンプが中まで入ってきってから跳んでいる。踏み込みがいつもと違うからなのか？意識して跳び方を修正して跳んでからは成功しているが、いつもとは異なる跳び方を感じる。

練習の途中では小技を練習したり教えあったり、自主的な貸切だからこその練習もする。「これ（バタフライ³⁵⁾）どうやってやるの？」と聞くと、「こうやって」とまずは動いて見せてくれて、そのあと私がやってみると、「もっと頭が下がる」、「ここで足あげる」等と教えてくれる。お互いに効果のある練習になっている。

(小括)

一般営業時間ではなく、貸切であるため、一般営業と比べて自由に滑ることができる。また、友人との練習のため、リラックスしながら、ライバル心もありながら、という練習環境である。

氷に対しては、〈滑る〉し〈のって〉、〈加速する〉と感じながらも、〈ういている感じ〉という感覚も同時に持ち合わせている。〈挟み込まれない感じ〉と感じたことから、これを克服するために感覚（動作）を氷と合わせたところ、〈刺さる〉というワードが出てきた。

4 ダイードリンコアイスアリーナ（東京都西東京市）（呼び名：東伏見、伏見）

滑走日：2023/7/30（日）

（情報）

このリンクは西武線東伏見駅前にあることから、「東伏見」あるいは「伏見」のリンクと呼ばれている。運営主体は、西武レクリエーション株式会社である。〔新横浜〕のリンクに通っている人にとって（多くが神奈川県民）、西武沿線はアクセスが悪く、日常の練習ではあまり利用することのない場所である。

この日は大学生の試合の日であった。非公式戦であり、筆者も出場することができた。東伏見のリンクで滑るのは、およそ8年ぶりである。

（7/30 観察記録）

東伏見のリンクはかなり久々だったため、氷について同じカテゴリー³⁶⁾に出場する2人に聞いてみた。すると、「ここ久しぶりはやばいね、新横とは結構違うよ」とのことだった。「よく滑る」とそのうちの1人が言ってくれた。

実際に氷にのってみたら、滑るのだが全く感触がない。〈レールの上にハマっている〉と感じるけれど、噛んでる感じが全くしない。踏み込むとスピードが出てしまうと感じる。カーブにのりすぎてしまっているかもしれない、と思った。

（小括）

東伏見のリンクは久々であった。大学の貸切等で利用している〔新横浜〕所属のスケーターから、氷の感覚について話を聞くことができた。実際に氷にのって驚いたことは、よく滑ることと、しっかりのる必要がある、ということだ。ただ、試合の中だけでは、〈噛んでる感じ〉はなかった。〈レールにハマっているが〉というワードは気になるのだが、試合はまた別の要因も重なるため、継続調査が必要である。

5 アクアリンク千葉（千葉県千葉市）（呼び名：アクア）

滑走日：2023/9/5（火）、9/6（水）、9/29（金）

（情報）

アクアリンクは、千葉市の海沿いにある。駅からは歩いていくにはかなり距離があるため、バス等を利用するが、リンクの目の前まで行くバスは1時間に1～2本であり、且つ時間帯が限られる。直通バス以外は、最も近いバス停から徒歩15分の場所にある。そのため、アクセスはあまり良い場所ではない。

（9/5 観察記録）

今回利用したのは、私の師事するコーチ以外の人に初めて振付をお願いしたからである。音楽はAコーチに作ってもらい、音源を振付師に事前に送信し、一般営業の時間に振り付けてもらった。今回お願いした振付師は、普段は季節リンクでコーチをしているが、季節リンクは10月からの営業となるため、今回アクアで振付を行った。横浜から行くのは非常に遠いが、仕方がない。

アクアはやはり空いている。しかし、他の人から聞いていたほど空いてはいなかった（ちょうど大人の方向けの教室の時間と被ってしまった）。

振付師より早く着いたので、先に氷にのって滑っていた。氷は滑りやすい。すいすいと滑っていく感じがする。のると〈しっかり反応してくれる〉と感じる。よく滑っている、と感じていた。柔らかく噛む感じがして、マッチしているから自然と伸びていく。気持ちよく滑れる。

振付は、ワイヤレスイヤホンを振付師と私とで片耳ずつ装着し、音を聞きながら進めていく。途中製氷を挟んで、計3時間45分だった。1曲分の3分半の振付が、全て終わった。今までと比べて難易度が数段上がっていて、覚えるのも滑るのも大変である。だが嬉しい。そして、今日はかなりの疲労感がある。ここからまた2時間かけて帰る。

(小括)

アクアでも滑るのは久しぶりであった。おそらく6年振りである。この間、アクアリンクは台風の被害を受け営業できない期間もあったが、今現在全く問題はない。主な移動手段が電車である筆者にとってはアクセスが悪いため、あまり利用していなかったのだが、“とても空いている”(アクセスのためか?)ということは、競技者仲間から聞いていた。空いていると周りを気にすることなく練習をすることができるため、“空いている”という情報は競技者にとってはありがたい。周りを気にする、ということは、周囲の目を気にすることではなく、避けるために後ろを見なくてよい、コースを変えなくてよい、手足を思い切り伸ばせる、等の“気を張る”必要が減ることである。特に振付は、本来は“リンク全面を縦横無尽に動くものを作る作業”であるため、広いスペースが必要になる。そのため、振付をするときは、空いているリンク、空いている時間を狙うことになる。

氷の滑りやすさには驚いた。滑っていると、氷が〈しっかり反応してくれる〉と感じた。これは、のったときに〈柔らかく噛む感じ〉がして、反発力があり、滑っていることを感じられる要素である。そして、〈自然と伸びていく〉滑りになっていた。スケートは伸びがどれほどあるか、ということに言い換えられるほど、伸びていくことはスケートの本質であり、普段の練習時より滑っている、伸びていく、と感じたことは、筆者自身も驚きであった。

6 東大和スケートセンター (東京都東大和市) (呼び名: 東大和、大和)

滑走日: 2024/7/21 (日)

(情報)

西武線東大和駅前にあるスケートリンクである。駅から徒歩1分という立地の良さだが、各駅停車しか止まらず、主要駅からの乗り換えが多いのが難点である。また一般営業の日が少なく、貸切営業で使われることが多い。西武レクリエーション株式会社が運営する、「BIGBOX 東大和」の一施設である。「大和」あるいは「東大和」と呼ばれている。東伏見のリンクと同じく、〔新横浜〕のスケーターからはアクセスが悪く、普段練習で使用することはほ

とんどない。

(7/21 観察記録)

この日は関東学生有志大会に出場するために、東大和へ来た。筆者が大学生の頃は、学生の大会はいつも東大和であったが、コロナ禍以降、東大和が存続問題に陥っていたこともあり、大会の開催場所は、群馬³⁷⁾や東伏見、〔新横浜〕に変わっていた。これまで東伏見で開催されていた学生有志大会であるが、今年度は東伏見が改修工事中で使用できず、東大和での開催となった。基本は学生の試合は学連の登録が必要だが、今大会は非公式試合のため、大学生であれば出場が可能であり、さらに大学院生のお出場も認められていたことから、出場することができた。

氷にのった。柔らかすぎ。なんだか滑らない、グニャッという感触。噛んでる感じがしない。硬いところのように弾かれるわけではないが、ハマってない感じ。緩い。ハマらないのでエッジジャンプが跳びにくい。

天井から水滴が落ちてくる。滑走中に手にのってくる。スピンの練習中に目の中に入ってきた。本番では落ちてこないことを祈る。水滴がボタボタ落ちてくるのでリンク表面がデコボコ。まっすぐ滑っているときに、小さな山にのりあげ、ボコっとなる。

ジャッジ席の上に、傘が逆さにつつて並んでいる。水滴対策だろう。見た目は可愛げもあるがシュールでもある。

(小括)

ここまで柔らかい氷は、東大和以外では感じたことがない。のって滑った瞬間から、〈お？なんだこの感じは？〉と思わず思ってしまう氷であった。噛まないの、エッジジャンプが抜けてしまいそうになり、慎重に実施する。他の競技者を応援している際、「このリンクはエッジジャンプが合わない人は合わないよね」という会話を耳にした。この柔らかさに慣れていなければ、あるいはそれに合った研ぎ方をしていなければ、難しいのかもしれない。筆者は今回、試合開催に合わせて特別に研ぎを行わなかったが、大学生時代、

インカレ³⁸⁾ 予選に出場する際は、このスケートリンクでの試合の時期に合わせて、エッジを深めに研いでもらっていた。氷の質が独特なリンクである。

V 分析

各リンクでの観察記録から、記載されているワードを取り出し、表にまとめた(表1)。分析ワードを元から設定し調査を行っていたわけではないが、共通のワードが記述されていた。

それぞれのスケートリンクにおいて、氷にのった際、氷に対してどのように感じているかが記載されている。まず硬いか柔らかいか、ということに意

表1 スケートリンクの特徴

	新横浜	銀河	浜銀	船橋	東伏見	アクア	東大和
通年・季節	通年	季節	通年	通年	通年	通年	通年
運営特徴	貸切枠が多く一般営業時間が少なく短いアイスショーや試合の開催が多い	一般営業の時間が長い相模原市民、市内団体が優先的に使用予約を取ることができる	大人のレジャー施設として使用されている印象	フィギュアクラブはアカデミー式	貸切枠が多く一般営業時間が少なく短い観客席がリンクの周囲4面全てにある	貸切予約が取りやすい	貸切営業の時間が長い
立地・交通の便	駅から徒歩8分	駅から徒歩30分。バスは約20～30分に1本	駅から徒歩5分	駅から徒歩10分	駅から徒歩1分	駅から徒歩40分。バスは時間帯による1時間に1本	駅から徒歩1分
一般料金 ³⁹⁾	1,250円	1,000円	1,350円	1,500円	1,600円	1,100円	1,600円
氷の厚さ	約8cm	—	約10cm	—	—	約7cm	—
氷の硬さ	柔らかい	硬い	少し硬い 硬い	少し硬い	—	柔らかい	とても柔らかい
滑る	滑る・滑りやすい	よく滑る	気持ちよく滑らない	滑りやすい	滑る	滑りやすい	なんだか滑らない
イメージ	滑りやすい	薄い板のよう浅い	引っかかる	のっていき加速するういている挟みこまれない	ルールにハマってる	反応してくれる自然とのびていく	グニャっという感触ハマってない感じ
技	—	スピンのやりやすい	前：踏み切る感触がある 後：エッジジャンプが跳びにくい	いつもと異なる跳び方	スピードが出る	—	エッジジャンプが跳びにくい
噛む感じ	する	しない	しない	〈ささる〉	しない	する	しない

識があることがわかる。滑り出し、〈この氷はどうなのか〉を確かめる項目のひとつは〈硬さ〉のようである。またそれぞれの氷に対していくつかのイメージを感じとっている。特に、技を行ったときに関連したワードとなって記載されている。例えば、銀河では、〈スピンのやりやすい〉、浜銀では、〈エッジジャンプが跳び上がらない〉、〈滑りにくい・滑りにくくない〉、船橋では〈いつもと異なる跳び方〉といった記載である。

それぞれのスケートリンクの氷は、標高等周囲の環境といった外的要素に加え、気温や湿度、天井の高さ等、室内の要素、そして氷の厚さや製氷の仕方等により、氷の質にも違いがある。技はどこのリンクにいても同じようにできることが理想かつ目標であるものの、競技者がそれぞれの氷と感覚をどれだけ合わせることができるかが、氷上スポーツの最初の関門であるといえる。

1 氷の硬さ

前述の通り、まず氷にのって最初に感じることは、〈氷が硬いかどうか〉であるようだ。それぞれのスケートリンクのエピソードで、氷の硬さは必ず記載のあるワードである。そして、それはかなり早い段階で記載されている。氷にのった瞬間に、競技者自身のこれまでの感覚と比較して、硬いかどうかを感じている。実際の氷との接点はブレードであり、その次に靴がきて、その後足の裏へ、という過程を経てスケーター本人の五感とつながるにもかかわらず、スケーターは氷にのった瞬間に氷を感じ、滑りだしていた。

また、硬いか柔らかいかという物理的視点と共に、スケーターは硬さにより、滑りやすいか、滑りにくいか、ということを感じている。競技者はホームリンクが最も滑りやすいことは間違いない（【エピソード6】）といえるが、その環境に近いか、あるいは身体動作としてマッチしやすいかが、滑りやすい、という感覚につながると考える。

また氷の厚さに関しては、どのスケートリンクにおいてもほとんど同じであるといえる。硬さに関しては、氷を張る段階での水質、室内温度・湿度、ブレインの設定温度、その調整の間隔等が左右する。厚さによる変化がない

ことから、これら環境による変化が、氷の硬さ・質に大きな影響を与えていることが示唆される。

2 噛む感じ

この表の中での最大の特徴であり、発見は、〈噛む感じ〉というワードである。この〈噛む〉という表現は、コーチとのレッスンの中でも登場する。そして、コーチは時によりさまざまに表現を変える。

A コーチ「そう、今の掴めたね、氷をガチッと掴んでた」(2023/11/24)

〈噛む感じ〉を表現するときに使う他のワードとして、この事例のように、レッスンにおいては〈掴む〉というワードが用いられた。

スケーター同士での会話では〈噛む感じ〉はあまり登場しない。これについて考えられることは、このような微細な感覚について会話する機会がない、ということがまず挙げられる。〈噛む感じ〉は非常に曖昧であり、また共有したところで感覚は自分で掴むものでもあると考えているからであろう。競技者同士での会話では、もっと技に直結する、腕や足の動かし方等が話題となる。氷について話題となる時、それは特別良い製氷後あるいは、特別氷が酷い状態であることがほとんどである。あるいは、ホームリンク以外での試合の際の情報共有等で、硬い、柔らかい、滑りやすい、滑りにくい、といったワードでの会話となる。

〈噛む感じ〉が直接交わされる場合は、ブレード研磨師との会話の中だ。競技者からの依頼として、「噛む感じがしなくなったから研ぎにきた」や「研いだ後、噛む感じがする」、あるいは「いつもより噛まない」等といった依頼を受けるようである。1 mm 以下、コンマの世界で研いでいるからこそ共感できる感覚なのかもしれない。

氷とブレードとの接点の感覚こそが、〈噛む感じ〉というワードになるようだ。

3 氷の硬さと噛む感じ

表を見ていくと、〈噛む感じ〉の記載のあるリンクは、氷が柔らかいことと連動している。〈刺さる〉という表現は、〈噛む〉と似た表現であることから、柔らかいほど〈噛む感じ〉がすることがわかる。ただし、東大和の事例のように、柔らかすぎると〈噛む感じがしない〉ことは明記しておかなければならない。適度な柔らかさによって、〈噛む感じ〉という身体感覚を得られる。〈噛む〉とは、つまり氷とブレードが密接になっている状態をさす。ブレードが氷に摩擦を起こし、その表面が溶けることにより滑走することが、スケート滑走の原理であるが、噛んでいる時は、この摩擦が最善の形で起きている。エッジの範囲内でしっかりと氷と接する、のることができると、安定感を得ることができる。この安定感こそが、〈噛む感じ〉であるといえる。

そして、筆者及び同じホームリンクのスケーター間では、柔らかいと感じるリンクの一部で〈噛む感じ〉が得られているが、これは、筆者のホームリンクが柔らかい氷であることとも関係している可能性がある。ホームリンクの氷の状態に合わせて、その氷上で良いパフォーマンスができるように、エッジを研いでもらっているからである。

4 考察

筆者がいつもと異なる環境で氷にのるときに感じていることは、〈滑る〉という事象に加えて、〈硬い〉か、〈噛む感じ〉があるか、ということであることがわかった。滑るという行為は普段の陸上での生活においては行われたい動作であり、氷上の身体技法は特殊な環境にいる者が獲得する暗黙知である。競技者それぞれが持つ〈噛む感じ〉という感覚を研ぎ澄ませることで、その場の氷に合わせ、技を正確に行えるよう身体動作の調整を行っていることが明らかになった。〈噛む感じ〉という暗黙知は、競技者が氷との調和によって得られる、氷上の身体技法であるといえる。

氷を感じるのは身体であるが、当然ながら、身体が氷に直接触れる訳ではなく、氷との間には、ブレード、靴、靴下等の複数の無機物が存在する。にもかかわらず、その下に存在する氷を、“もの”としてではなく、“調和する

仲間”として感じる感覚が要求される。人と人、人と“もの”との関係を表す際に、○○と仲良くするや、○○との調和という言葉が使われるが、スケートでは、何より氷との調和が必至である。

氷は生き物のようであり、様々な条件により日々、刻々と状態は変化する。氷の条件には、氷の厚さ、氷の層、標高、温度、湿度、時間、製氷のやり方等さまざまな異なる要素が関係する。同じ場であっても、寒い日は硬く、暖かい日は緩く・柔らかくなり、製氷直前はザラザラ・デコボコであるが、製氷後はツルツルである。スケーターは、このさまざまな顔を持つ氷に調和していくことが求められる。氷の微妙な変化を、コーチも競技者も常々感じ取り、それを共通理解とした指導が行われる。試合等で行う演技、パフォーマンスを披露する時は、競技者・スケーターのメインの練習場所（ホームリンク）ではない氷の上で行うことがほとんどである。氷と調和できないことには、最大限の力を発揮することはできない。

他のスケートリンクに行くと、各リンクの氷に明らかな個性を感じる。このような個性を感じながら、そのときどきの氷に合わせ、噛む感じを始めとする氷上の身体技法を用い、スケーターは滑走し、技を行っていた。

VI 結論

フィギュアスケートでは、噛む感じを始めとする氷上の身体技法を用いながら、氷を含む様々な“もの”との密接な調和が求められることがわかった。これらの“もの”のうち、ブレード、スケート靴、衣装の重さやバランス等は無機質なものであるのに対し、氷は有機質的であり、生き物のようであるといえることができる。無機質なものに対しては、一方的に競技者からの調和が求められることに対し、生き物のような氷との調和は、お互いの歩み寄りが必要であることがわかった。とはいえ、氷自身に意思があるわけではないので、どのような氷質に仕上げるかは、各リンクの環境・整備・製氷次第である。競技者には、人の関わりが作り出した、“もの”ではなく生き物のような各リンクの氷について、試合直前の6分間⁴⁰⁾で掴み取り、噛む感じと

融合させ、己の技と調和させていく鋭い感覚が求められる。

謝辞

本研究の執筆にあたり、横浜市立大学の板垣明美先生には、多大なるご指導を頂きました。深く感謝申し上げます。

また本研究を遂行するにあたり、KOSÈ 新横浜プリンス FSC の佐藤信夫コーチ、佐藤久美子コーチには、貴重なお話しを伺いました。心よりお礼申し上げます。そして、調査に協力して頂いたコーチ・競技者を始めとするスケーターの皆様、関係者の皆様に、深くお礼申し上げます。

注

- 1) フィギュアスケートには、男子シングル、女子シングル、ペア、アイスダンス、シンクロナイズドスケATINGの5競技ある。このうち、シンクロナイズドスケATINGを除く4競技が、世界選手権・五輪に採用されている。
- 2) 2024/7/3 参与観察記録：A コーチ「感覚だからね。感覚なんてなんとなくだから。はっきりなんてわかんないんだよ、水物。こんな感じ、でなんとなくで、それを掴んで」
- 3) 本論文において、強調の意味で用いる記号を“ ”とする。
- 4) モーションキャプチャーにおけるセンサーや、サッカー競技等でよく用いられる GPS ベスト等。
- 5) 専門用語「ブレード」に記載
- 6) ブレードの中でも、氷と直接接する部分をエッジと呼ぶ。エッジは刃物のため研磨が必要であり、専門の技術者又は技能を持ったコーチにより、エッジの深さを調整する。エッジは横幅が4 mm ほどしかないが、この4 mm の中央部分をへこませ溝を作る。この溝をエッジの深さと呼ぶ。溝を作ることで氷との接地部分が左右2本の細い線状になる。この2本の使いわけによって、インサイド、アウトサイドにのりということが出来る（基本的にインアウトのどちらかにのり滑走する）。エッジの深さは、滑る、回る、跳ぶ感覚に直結する。
- 7) 2024 年現在、筆者のバッジテスト所持級は5級（フリー級6級）である（初級から8級まで存在）。
- 8) 2021 年8月時点（HP上で最新の情報）。日本スケート連盟 HP「全国スケートリンク」<https://www.skatingjapan.or.jp/rink/> (2024/11/24 最終閲覧) を基に筆者が集計。
- 9) クラブの貸切時間は、取得級により、分けられている。朝は各45分、夜は40分～70分。ダンスコースは所属人数が少ないため、貸切時間も少なく、また夜の貸切時間はシングルコー

スの貸切後に設定されているため、かなり遅い。余暇としてスケートを楽しんでいる人向けのコースであるアイスフレンドは12時頃～14時頃と、昼間に貸切時間が設定されている。

- 10) 記録している館内気温は、施設内2階東側観客席後ろの通路に掲示されている時計に表示されている温度である。観察期間の後半から、湿度の記録も行った。
- 11) 論文中の人物については、人物一覧表に記載
- 12) 専門用語「ジャンプ」に記載
- 13) 「のる」は、スケートの重要な言葉である。筆者の修士論文において既に明らかにしているものである。「よく滑るためには、“のる”という感覚を求められる。スピードを“出す”のでも、氷を“押す”のでもなく氷を“蹴る”のでも、スピードに持っていられないように“耐える”のでもなく、“のる”のである。これは、指導の中にも（中略）何度も出てくることばである。（中略）感覚的にわかると、“のる”という言葉の深みが理解できる。」作成した語彙分析表では「のる」は全体の約10パーセントを占めた。
- 14) 本論文において、日常的に用いる語でなく、感覚の言語化を含むスケート用語として使用する語に、〈 〉の記号を用いる。
- 15) 専門用語「バンク」に記載
- 16) ループジャンプのこと。専門用語「ジャンプ」に記載
- 17) フリップジャンプのこと。専門用語「ジャンプ」に記載
- 18) ルッツジャンプのこと。専門用語「ジャンプ」に記載
- 19) 歩くこと（歩行）ではなく“歩き方”は、生を受け育った環境により変わる身体技法である [モース 1976；川田 1992；板垣・西村 2022]。
- 20) 専門用語「ブレード」に記載
- 21) 専門用語「ブレード」に記載
- 22) スケートリンク氷面の長辺両サイドにアイスホッケーで利用する際に用いる色付けされたエリアがある。
- 23) 普段、氷はアイスホッケー用のフェンスに囲まれている。
- 24) バッチは〔新横浜〕のクラブで毎夏行われる追加の貸切枠である。級ごと（0～2級、3～4級、5～6級、7級）にクラス分けされ、希望者が料金を払って滑走する。〔新横浜〕では8級取得者はいないため（現在取得メリットがあまりない）、7級がスケートリンク内最上級クラスである。
- 25) 横浜銀行アイスアリーナのこと。IV章に詳細を記載。
- 26) 長野県岡谷市にあるスケートリンク。Eが師事しているコーチが合宿で使用している。
- 27) 東京都新宿区にあるスケートリンク。
- 28) 銀河アリーナのこと。IV章に詳細を記載。
- 29) 本来縦方向にしか進まないブレードで、横滑りしてしまうこと。「抜ける」とも言う。

- 30) 専門用語「ステップ」に記載
- 31) 注 29 の「スリップ」と同じ。
- 32) 専門用語「スピン」に記載
- 33) 振付を行う際には、競技規則に則った様々な条件をクリアして行う必要がある。例えば“アクセルジャンプは必ず1回含めなければならない”や“同一種類の3回転ジャンプは2度までのみ得点要素としてカウントする”等である。また、選手それぞれ得意・不得意な技や動きがあり、それをいかに利用するか、が振付では大切になる。技を次々で行うだけでは演技とはいえ、間の使い次第で、演技の評価が変わる。氷上の面積をいかに多く、複雑なコースで使えるかも、振付の醍醐味である。これらを行うことで、選手オリジナルのものが出来上がる。
- 34) 専属コーチを置かず、クラブのコーチ全員がクラブの選手全員を見る（主となる担当コーチは存在する）。
- 35) 足技の一種。片足で滑走しながら、もう一方の足のトゥを氷に引っ掛け、跳び上がる。この際上体は氷と並行にする。両足が氷から離れ、上体同様、氷と並行になるポジションまで持ってきたあと、打ち付けた足で着氷する。
- 36) 男子5・6級クラス
- 37) 群馬県前橋市にあるスケートリンク。
- 38) 日本学生氷上選手権大会のこと。通称インカレ。全日本インカレの予選である東日本インカレの開催場所が、毎年東大和であった。
- 39) 立地・交通の便の悪さ、つまり駅から遠いほど、一般滑走料金が安くなっている。しかしながら、これは経営主体や経営戦略とも関わってくるため、この表のみで一概に判断することはできない。
- 40) 試合では、各グループ（最大6名）の演技前に6分間の練習時間が設けられる。「直前練習」、「6分間練習」と呼ばれる。主要大会では、当日朝や前日に公式練習の時間が設けられるが、このときの氷の状態と本番の氷の状態は、時間帯による外気温の変化や館内の人数、照明の明るさ等、様々な環境に左右され、全く同じ状態とはならない。

参考文献

荒川祐有

2023「フィギュアスケートともの：ものからみた技術と感覚」『常民文化』46：1-33

板垣明美・西村拓一

2022「身体技法としてのボールルーム・ダンス歩行に関する人類学的研究」『文化人類学』87

(3)：367-386

川田順造

1992『西の風・南の風：文明論の組みかえのために』河出書房新社

倉島哲

2007『身体技法と社会学的認識』世界思想社

諏訪正樹

2016『「こつ」と「スランプ」の研究 身体知の認知科学』講談社選書メチエ

竹内洋輔

2017「フィギュアスケートの回転ジャンプパフォーマンス評価のための身体測定部位と方法に関する検討：肩峰間と大転子間における陸上回転ジャンプ測定からの検討」『法政大学スポーツ研究センター紀要』35：89-94

武田理

2020「フィギュアスケートシューズの特性と構造：スポーツシューズの8大機能と関連付けて」『氷上スポーツ研究』2(1)：17-20

橘由香里・栗原俊之・井坂忠夫

2017「フィギュアスケート男子シングルにおけるジャンプの成功と演技構成点の関係」『日本体育学会大会予稿集』68(0)：218_1-218_1

2018「フィギュアスケートの採点におけるジャッジ匿名性の有無による影響」『日本体育学会大会予稿集』69(0)：205_3

八田益之・田中研之輔

2017『覚醒せよ、わが身体。トライアスリートのエスノグラフィー』ハーベスト社

羽生結弦

2021「無線・慣性センサー式モーションキャプチャーシステムのフィギュアスケートでの利活用に関するフィージビリティスタディ」『人間科学研究』補遺号2021：1-7

福島真人編

1995『身体の構築学』ひつじ書房

町田樹

2020『アーティストックススポーツ研究序説 フィギュアスケートを基軸とした創造と享受の文化論』白水社

2022「フィギュアスケートと音楽—ふたつの文化をめぐる歴史と美学」『さあ、氷上芸術の世界へ—フィギュアスケートと音楽』音楽之友社

水野英莉

2020『ただ波に乗る Just Surf サーフィンのエスノグラフィー』見洋書房

水野学・小塚崇彦

2019「リード・ユーザーとメーカーによる共創型製品開発：—フィギュアスケーターによるフィギュアスケーターのための製品イノベーション—」『マーケティングジャーナル』39(2)：6-21

村上靖彦

2023『客観性の落とし穴』筑摩書房

安原雅之・佐藤さくら

2017「フィギュアスケート競技で使用される音楽の研究：第15回オリンピック冬季大会（1988年）における女子シングルに焦点をあてて」『愛知県立芸術大学紀要』47：135-147

柳田憲一

2015「演技構成を目的とした音楽再構成に関する研究」『東京女子体育短期大学紀要』50：119-127

山下篤央・久米雅・右近直子・森井秀樹

2015「フリップジャンプの回転数が膝関節と股関節の角度変位に与える影響」『京都文教短期大学研究紀要』53：91-96

マイケル, ボランニー

2003『暗黙知の次元』高橋勇夫訳 ちくま学芸文庫

M, モース

1976『社会学と人類学Ⅱ』有地亨, 山口俊夫訳 弘文堂

アクアリンクちばHP「施設概要」

<http://www.aquarink-chiba.jp/outline.html> (2024/11/26 最終アクセス)

西部レクリエーションHP

<https://www.seiburec.jp> (2024/11/26 最終アクセス)

淵野辺公園銀河アリーナの指定管理者の概要

https://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/028/801/07.pdf (2024/11/26 最終アクセス)

三井不動産アイスパーク船橋HP「運営会社」

<https://mf-ice.com/company/> (2024/11/26 最終アクセス)

横浜銀行アイスアリーナHP「施設案内」

<https://yokohama-icearena.jp/about/> (2024/11/26 最終アクセス)

専門用語一覧

ブレード … フィギュアスケートの靴は、靴とブレードという二つのものを組み合わせて使用する。そのうち、鋼製品のブレードは、靴底と接する面から、氷と直接接する刃を持った面までの部分である。ブレードの先端部分、ギザギザしているところをトゥと呼び、ジャンプの際は、こ

こで引っかけることにより跳び上がる。ブレードには、エッジカーブ半径、溝半径、溝幅、トゥの形状という四つの要素がある。詳細な説明は、筆者の既出論文に示してあるため、そちらを参照して頂きたい [荒川 2023]。

エレメンツ・要素 … 採点項目の技術点としてカウントされる技を指す。ジャンプ、スピン、ステップがそれである。

ジャンプ … 回転は全て同一方向（ほとんどの選手が左回転）である。左回転の選手は、着氷は全て右足となる。トゥループ、サルコウ、ループ、フリップ、ルッツ、アクセルの6種類である。これらはアルファベット表示で略すことがあり、順に T、S、Lo、F、Lz、A である。このうち、トゥループ、フリップ、ルッツジャンプを、トゥについて跳び上がるためにトゥジャンプと呼び、サルコウ、ループ、アクセルをエッジで跳び上がるためにエッジジャンプと呼ぶ。ジャンプごとの詳細は下に別途まとめた。回転数は1回転をシングル、2回転をダブル、3回転をトリプルと呼び、4回転は4回転又はクワッドと呼ぶ。回転数はそれぞれのジャンプの名称の前に付ける。例えばアクセルジャンプの3回転はトリプルアクセル（3A）である。

ジャンプ詳細

ジャンプ名	トゥ or エッジ	滑走足	踏み切り足	基礎点（トリプル）
トゥループ（T）	トゥ ジャンプ	右 バックアウト	左	4.2
サルコウ（S）	エッジ ジャンプ	左 バックイン	左	4.3
ループ（Lo）	エッジ ジャンプ	右 バックアウト	右	4.9
フリップ（F）	トゥ ジャンプ	左 バックイン	右	5.3
ルッツ（Lz）	トゥ ジャンプ	左 バックアウト	右	5.9
アクセル（A）	エッジ ジャンプ	左 フォアアウト	左	8.0

スピン … アップライト、シット、キャメル の3ポジションがある。基本の回転は全て同一方向（ほとんどの選手が左回転、ジャンプの回転方向と同じ）である。全て片足で行う。両足になったタイミングでスピンは終了したとみなされる。シットはスケーティングレグ（氷と接している足）の大腿部が少なくとも氷に平行となっている姿勢、キャメルはフリーレグ（氷と接していない足）が後方に位置し、その膝がヒップより高い姿勢、その他スケーティングレグを伸ばして、又は軽く曲げて行う全ての姿勢がアップライトである。これら三つの基本姿勢に工夫（バリエーション）を行うことでレベルが取れる。レベルがあがると技の基礎点上がる。最大レベルは4である。コンビネーションスピン（技の正式名称はスピン・コンビネーション）は、3ポジションを最低2回転ずつ回ることが求められる。

ステップ … 技術点としてカウントされる要素としてのステップと、身体を回転させる技としてのステップの、同じ言葉で指す二つのものがある。要素としてのステップとは、ステップシークエンスとコレオシークエンスの二つである。SP（ショートプログラム）、FS（フリースケーティング）あるいは所持級により、必須となるステップの要素が異なる。技としてのステップは、

ターンとステップの2種類に分けられる。ターンは、ツイズル、ブラケット、ループ、カウンター、ロッカー、スリーターンの6種類、ステップは、トゥステップ、シャッセ、モホーク、チョクトウ、エッジの変更、クロスロールの6種類である。この中で難しいターン及びステップとして採点上認識されるものは、ツイズル、ブラケット、ループ、カウンター、ロッカー、チョクトウである。

バンク … ジャンプの失敗の形のひとつ。踏み切りの際、タイミングが合わないことで、身体をまとめられず開いてしまい、ほとんど回転できない状態を指す。

調査対象者人物一覧表

A	筆者のコーチ。〈新横浜〉専属のインストラクター。男性。
B	〈新横浜〉で製氷作業、夜間施設管理を行っている。男性。
C	数年前までクラブ所属。友人。現在はプリンスホテルの従業員として〈新横浜〉で施設運営等を行っている。男性。
D	クラブ所属。現役大学生スケーター（調査当時）。筆者がクラブへ移籍してきた当初からの友人。筆者と比較的同じ時期に、級の取得等ステップアップしてきた友人。男性。
E	クラブ所属。現役大学生スケーター。筆者と比較的同じ時期に、級の取得等ステップアップしてきた友人。女性。
F	クラブ所属。現役スケーター。友人。数年前よりシングルからアイスダンスに転向。女性。
G	クラブ所属。現役スケーター。友人。数年前よりシングルからアイスダンスへ転向（調査当時はシングルも継続）。女性。
H	クラブ所属。現役大学生スケーター。友人。女性。
I	数年前までクラブ所属。現在は別のスケートリンク・クラブでコーチをしている。友人。男性。

* この表においてクラブとは〔新横浜〕直属のフィギュアクラブである、“KOSÉ 新横浜プリンスFSC（フィギュアスケートクラブ）”のことを指す。

* この表において特に記載のない場合、スケーターとはシングル競技者のことを指す。